

企業倫理学の2つの方法論的枠組み

Two Methodological Frameworks in Business Ethics as an Academic Discipline

経済学研究科経済学専攻博士後期課程在学

村 田 大 学

Daigaku Murata

目次

はじめに

I. 背景：企業倫理学の方法論争

1. 2つの分析アプローチ
2. 研究者間の衝突と論争

II. 企業倫理学の4つの方法論的立場

1. パラレル主義
2. 共生主義
3. 統一主義
4. 第四の立場

III. 企業倫理学の2つの方法論的枠組み

1. 2つのメタ理論的前提
2. 2つの方法論的枠組み

おわりに

はじめに

企業倫理学 (Business Ethics) は、企業倫理の問題が深刻化する中で、1970年代から研究が開始された比較的新しい学問領域である。当時、米国においては、1964年の公民権法の制定後、環境問題の深刻化や不正な政治献金の問題などから、企業倫理への関心が高まっていた。企業倫理学の研究は、もともと哲学者達を中心に進められてきたが、1980年代半ばから今日にかけて、経営学者や心理学者など様々な学問領域出身の研究者が、この領域へ参入してきた。

企業倫理学は、このように、豊かな学際性という特色をもっている。この領域へ参入した研究者たちは、自分達の出身学問領域の分析アプローチを用いて研究を行ってきた。この中で、多くの論者が、

企業倫理学の方法論を検討してきた。しかしながら、これらの各方法論の中身を詳細に吟味し、その共通点と相違点を整理して、その関係を企業倫理学の方法論的枠組みとして明らかにした研究は、少ない。本稿は、この課題に取り組もうとするものである。

本稿では、まず、企業倫理学の各方法論的立場、及び、分析アプローチが生まれた背景を見ていき、それらが何故生まれたのかについて簡単に理解しておく。その上で、それらの中身を整理し、その共通点と相違点をまとめる。以上の手続きを経た上で、最後に、企業倫理学の方法論的枠組みの中で、それらをどのように位置づけられるのかについて検討する。

I. 背景：企業倫理学の方法論争

1. 2つの分析アプローチ

企業倫理学では、哲学者達がとる分析アプローチと経営学者などの諸社会学者達がとる分析アプローチの2種類がある。前者は、規範的アプローチと、後者は、経験的アプローチと呼ばれるのが一般的である¹⁾。トレヴィーニョとウィーバー (Treviño & Weaver, 1994) は、これら2つの分析アプローチの特徴を、表1のようにまとめている。

表1：規範的アプローチと経験的アプローチ

	規範的アプローチ	経験的アプローチ
①アカデミック・ホーム	哲学・神学・リベラルアーツ	経営学・(その他の)社会科学
②言葉	評価的	記述的
倫理的行動・行為の定義	正しい行動 公正な行動 公平な行動	倫理的評価 倫理的意思決定
③モラル主体たる人間についての基本的前提	自律性 責任	より決定論的 相互の因果関係
④理論の目的	規定・禁止	説明・予測
理論の範囲	抽象的	具体的・測定的
理論の応用	分析・批判	実際の行動に影響を与えること
⑤理論の基盤	企業行動の考察	企業行動の実証研究
理論の評価	道徳評価についての合理的批判	経営上の問題を説明・予測・解決する能力

出所：Treviño, L. K., & Weaver, G. R. (1994). "Business ETHICS/BUSINESS ethics: ONE FIELD OR TWO?" *Business Ethics Quarterly* 4(2), "Table1 Normative and Empirical Approaches to Studying Business Ethics," p.115.を筆者訳。 () 内の内容は筆者が付け加えたもの。

表1にある規範的アプローチの特徴を説明すると次のようになる。規範的アプローチは、「何をすべきか」という価値を分析対象とする分析アプローチである。この分析アプローチをとる研究者（以下、規範論者）は、哲学者や形而上学者達によって占められている。その言葉は、評価的であり、彼らの場合、「倫理的行動」という言葉は、価値的な行動を指す。規範論者達は、「人間は、自由意思を持った自律的な存在である」との前提に立つため、責任という概念が議論される。彼らは、批判に基づく価値内容の論理的正当化を通して、理想を追い求める。

一方、経験的アプローチをとる研究者（以下、経験論者）は、理想ではなくありのままの事実を分析対象とする。経験論者は、経営学者や社会学者など諸社会科学者達によって占められている。その言葉は、記述的であり、彼らの場合、「倫理的行動」という言葉は、倫理に関する行動全般を指す用語であり、必ずしも価値的な行動のみを意味するとは限らない。経験論者達は、「人間は、自由意思を持たない他律的な存在である」との前提に立つため、個人の責任という概念は意味を持たない。彼らは、実証研究等による客観的真理・法則の記述を行い、それにより、現象を説明・予測することを目的とする。

この1つの学問領域にこれら2つの相異なる分析アプローチが併存するという現象は、1980年代に発生した²。もともと企業倫理学の研究は、企業は何を理想として掲げるべきかを検討してきた哲学者達によって1970年代半ばあたりから開始された。当時、企業倫理に対する社会的関心は、非常に高まっていた。経営学者達も同様の問題意識を持ってはいたものの、彼らは、アメリカ経営学会の企業の社会的課題事項部会のメンバーを中心に、CSR論として研究を行ってきた。これら2つの研究領域を区分する境界線は、その分析対象の類似性から曖昧なものであった。1980年代には、両研究領域間の相互交流が盛んに行われるようになった。同年代末には、企業倫理学の研究として多くの経営学者達が研究を行うようになった。1988年には、CSR1,2,3,4の段階論でも著名なフレデリックが、アメリカ経営倫理学会で現在の会長職にあたる執行委員（the Executive Committee）に選出されるまでになった。

2つの分析アプローチの特徴は、以下のようにまとめることが出来る。規範的アプローチは、企業は何をすべきであるのかといった価値に接近する性格をもつものであり、一方、経験的アプローチは、企業不祥事はなぜ起きるのかといった事実接近するものである。より簡潔に言えば、前者は、理想を、後者は、現実を追い求める。この区分は、価値と事実、すなわち、理想と現実は、性質的に没交渉的なものであるとのメタ理論的前提に依拠している。このメタ理論的前提は、事実と価値の二元論（fact-value dichotomy）と呼ばれる。

ここでいうメタ理論的前提とは、論理を組み立てるための基盤となる前提のことである。論理を組み立てる上では、何らかの前提に立つことが求められる。人間は自律的存在か、それとも他律的存在かといった人間観などが例として挙げられる。また、理論的な基礎付けという枠を超えていることもメタ理論的前提の特徴である。

2. 研究者間の衝突と論争

1990年代初頭、企業倫理学者には、規範論者と経験論者が併存していたわけだが、この頃になると、両研究者間の衝突が顕著となってくる。トレヴィーニョとウィーバーは、この衝突の例として、アメリカ経営学会の経営における社会的課題事項部会の年次集会において行われた議論を取り上げている³。そこでは、哲学者が、経営学者達が倫理的価値を考慮しない点を批判し、後者が、前者の用いる哲学术語を現実的でない「無意味な宗教的呪文 (mambo jumbo)」と批判する模様が描かれている⁴。

先述したように、規範論者は、理想を、経験論者は、現実を探求するという違いがあったため、このような衝突は、必然的であったといえるかもしれない。1990年以降、この方法論争は、激しさを増していく。これは、企業倫理学独自の分析アプローチを確立しようという試みでもあり、また、理想と現実を調和させようとする試みでもあった。規範的アプローチと経験的アプローチの関係が議論されていく中で、その関係を巡る4つの立場が提唱された。

II. 企業倫理学の4つの方法論的立場

1. パラレル主義

ウィーバーとトレヴィーニョ (1994) は、企業倫理学の方法論争では、2つの分析アプローチの関係を巡る3つの立場が形成されうる、または、されているとしている⁵。パラレル主義 (parallelism) は、その3つの方法論的立場の内の1つである。パラレル主義は、分析対象のみが共有可能とし、両分析アプローチの統一のみならず補完関係すら成り立たないとする立場である。メタ理論的前提として事実と価値の二元論に立ち、論理的根拠として、共約不可能性 (incommensurability) を掲げることにその特徴がある。

事実と価値の二元論とは、事実と価値はお互いに無関係なものであるとする立場である⁶。ここでいう事実 (facts) とは、人間の主観が排除された客観性、合理性、自然科学的真実・法則性といった従来の科学の分析対象全般を指す用語である。事実の例として、人間の行動原理、自然法則、客観性といったものが挙げられる。また、価値とは、従来の哲学者たちが研究してきた社会文化的・歴史的コンテキストに左右されない絶対的・普遍的価値を指す。価値の例として、人権、平等、自由、正義、民族としての純粋さ、人類の統一、対話 等がある。そのため、事実と価値の二元論に立つ研究者 (以下、分離主義者) は、誰もが否定できない現実と完璧な理想を学問によって明らかにすることが出来るとの思想を持っている。

また、共約不可能性とは、米国で盛んに議論されてきた概念で、これを最初に提唱したクーン (1976) は、共約不可能性を、「完璧な表現が可能で、かつ、諸理論のポイントごとの比較に置いて使用されるような共通言語は存在しないこと⁷」を主張するために使用したと述べている。共約不可能性をめ

ぐっては多くの議論がされてきたが、本稿では、共約不可能性を、誰もが全く同じように理解することが出来る言語（普遍言語）は存在しないため、永久に相手のことを完全に理解することは不可能であることを意味する用語として扱っている。この共訳不可能性が存在するため、パラレル主義では、規範論者も経験論者もお互いを理解することは出来ないとされる。

2. 共生主義

ウィーバーとトレヴィーニョが提唱した3つの方法論的立場の内の2つ目に、共生主義（symbiosis）がある。共生主義は、両分析アプローチの補完関係は成立するものの、理論の核心の違いのため統一が不可能であるとする立場である。メタ理論的前提として事実と価値の二元論の前提に立ち、論理的根拠として理論の核心の3つの違いを掲げることにその特徴がある。

また、理論の核心の違いとは、理論的原理、手法⁸、メタ理論的前提の3つの次元での違いのことを指す。理論的原理、すなわち、理論の性格だが、規範的アプローチは規範的であるのに対して、経験的アプローチは記述的であるという違いがある。また、手法だが、規範論者は、批判・論証を行うが、経験論者は実証分析・ケーススタディなどを用いる。そして、メタ理論的前提の違いだが、両論者とも事実と価値の二元論の前提に立つことから、規範論者は、人間を自律的存在として、経験論者は、人間を他律的存在としてとらえるという違いがある。

3. 統一主義

ウィーバーとトレヴィーニョが提唱した3つの方法論的立場の最後は、統一主義（theoretical integration）である。統一主義は、両分析アプローチを唯一の普遍的な方法論に統一することが可能であるとする立場である。メタ理論的前提として統合命題の前提に立ち、論理的根拠として理論混合を掲げることにその特徴がある。

統合命題とは、事実も価値も、人間の想像の産物、すなわち、イマジネーションに過ぎないとする立場である⁹。イマジネーションのあり方や内容は、歴史的・社会文化的コンテキストからも影響を受けるし、各人特有の認識や想像の仕方によっても影響を受ける。そのため、この命題からは、事実と価値の二元論を否定する態度が導き出される。この点からも明らかなように、統合命題の前提に立つ研究者（以下、統合主義者）は、科学者も哲学者も真理（常住不変的な意味での）を明らかにすることは出来ないとの思想をもっている。

理論混合とは、概念輸入、理論上の相互依存関係、理論統一という3つの次元で起きる規範的アプローチと経験的アプローチの統一の流れのことをいう。概念輸入は、他の学問領域からの概念の輸入であり、経営学においてCSRといった責任という概念が用いられていることは、その事実を裏付けるものであるといえるかもしれない。理論上の相互依存関係とは、規範的アプローチと経験的アプローチの間では相互に独立した関係が成立しえないため、両分析アプローチの相互依存関係を指す。実際

に、規範論者がいくら正義や平等の重要性を説いても、経験論者の主張や考え方を取り入れない限り、それがあまりにも抽象的なものになってしまうことが考えられる。そして、理論統一とは、手法とメタ理論的前提の統一のことをいう。たとえば、人間には自律的側面もあるし他律的側面もあるといった主張は、メタ理論的前提の次元での理論統一の例といえる。

4. 第四の立場

ローゼンソールとブックホルツ (Rosenthal & Buchholz, 2000) は、ウィーバーとトレヴィーニョの3つの方法論的立場とは異なる4つ目の立場として、第四の立場 (a fourth alternative) を提唱している (表2) ¹⁰。これは、統合命題の前提に立つものの、規範的アプローチと経験的アプローチが統一される必要はないとする立場である。パラレル主義、共生主義、統一主義の内容を見てみると、唯一無二の完璧な分析アプローチが存在するとの前提に暗黙的に立っていた。しかしながら、彼らは、そんなものは妄想であり、手法の違いは研究者の態度・目的次第であって、何も統一される必要はないとする。メタ理論的前提として統合命題に立つこと、論理的根拠としてプラグマティズムを掲げることが第四の立場の特徴である。

表2：企業倫理学の4つの方法論的立場

	パラレル主義	共生主義	統一主義	第四の立場
メタ理論的前提	事実と価値の二元論	事実と価値の二元論	統合命題	統合命題
研究者	分離主義者	分離主義者	統合主義者	統合主義者
両分析アプローチの統一	不可能	不可能 (だが補完関係は成立)	可能 (必然性)	不可能であり何より不必要
論理的根拠	共約不可能性	理論の核心の違い (理論的原理、手法、メタ理論的前提)	理論混合 (概念輸入、理論上の相互依存関係、理論統一)	プラグマティズム
研究者の例	マックス・ウェーバー、ニュートン	ネルら	トレヴィーニョ、ウィーバー	ローゼンソール、ブックホルツ

出所：Rosenthal, S. B., & Buchholz, R. A. (2000). "The Empirical-Normative Sprit in Business Ethics: A Pragmatic Alternative." *Business Ethics Quarterly* 10(2):399-408.、及び、Weaver, G. R., & Treviño, L. K. (1994). "Normative And Empirical Business Ethics: Separation, Marriage of Convenience or Marriage of Necessity?" *Business Ethics Quarterly* 4(2):129-143.の内容を基に、筆者作成。

プラグマティズムは、実用主義とも訳される。プラグマティストの種類も多様だが、ここでは、ローゼンソールとブックホルツにおけるプラグマティズムの認識をまとめ、説明したい。人間のすることには必ず限界があり、そのため人間には真理を明らかにすることはできない。そのため、学問を含め、人間の主張が絶えず批判されうるような場が要求される。また、人間は偶発性、すなわち、偶然に発生することを完全に予測することも出来ない。そのため、プラグマティズムでは、学問の使命は、真理を明らかにすることではなく、何かの目的のために役立つことにあるとされる。第四の立場の場合は、この点が強調されており、研究者は、目的にあった手法を選択すればよいとされている。

ローゼンソールとブックホルツは、事実と価値の二元論が否定されたとしても、研究の目的や分析で用いられる理論の役割の違いから、規範的アプローチと経験的アプローチを統一する必要は何もないとする¹¹。その上で、彼らは、ウィーバーとトレヴィーニョの3つの方法論的立場と第四の立場の相違点を次のように説明している¹²。理論の相互適用を認める点で、第四の立場と共生主義は共通点があるものの、事実と価値の二元論の前提に立たない前者は、パラレル主義のみならず後者とも異なる。さらに、第四の立場は、規範的アプローチと経験的アプローチの区分を認める点で、概念輸入、理論上の相互依存関係、理論統一による両分析アプローチの統一を主張する統一主義とも異なるのである。

Ⅲ. 企業倫理学の2つの方法論的枠組み

1. 2つのメタ理論的前提

企業倫理学の4つの方法論的立場を概観すると、これらはメタ理論的前提として、事実と価値の二元論に立つものと統合命題に立つものの2つが取られていることが分かる。先述したメタ理論的前提の特徴をまとめると表3のようになる。

表3：2つのメタ理論的前提

	分離主義（者）	統合主義（者）
メタ理論的前提	事実と価値の二元論	統合命題
真理（事実と価値）	人間の主観を離れて存在するもの	イマジネーション
不変性	常住不変なもの	常に変化するもの
発見可能性	発見可能	発見不可能
事実に対する理解	科学の分析対象である真理	イマジネーション
価値に対する理解	哲学の分析対象である真理	イマジネーション

出所：Frederick. (1994a, b). Harris & Freeman. (2008). Hartman, E. M. (2008). Weaver & Treviño.

(1994).など、企業倫理学の方法論争に関連する文献の内容を基に、筆者作成。

分離主義者は、メタ理論的前提として、事実と価値の二元論に立つ。彼らは、事実と価値は、人間の主観から独立した常住不変な真理として存在しており、それらは、それぞれ科学と哲学によって発見可能であるとの思想をもつ。一方、統合主義者は、メタ理論的前提として、統合命題に立つ。統合主義者は、事実と価値は、人間の作り出したイマジネーションであり、常に変化するものであると考える。そのため、統合主義者たちは、「学問は何のために存在するのか」という問いに常にさらされていることになる。

実際に、近年、企業倫理学の使命に対する議論は、活発に行われてきている。統合主義者は、企業倫理学の方法論争の中で、確実に増加してきたが、2005年のアメリカ経営倫理学会の年次集会におけるローティの招待演説は特に議論された。この招待演説で、ローティ (Rorty, 2006a, b) は、企業倫理学の使命を、何らかの目的に役立つ道具を提供することであると主張した¹³。翌年の *Business Ethics Quarterly, Volume 16, Issue 3* では、彼のこの主張に対するディジョージ (De George, 2006)、ワーヘイン (Werhane, 2006)、ケーン (Koehn, 2006) の3人の返答が掲載されている¹⁴。

2. 2つの方法論的枠組み

これまで見てきたように、企業倫理学の方法論には、2つの異なる次元から方法論的立場が形成されている。すなわち、2つの分析アプローチの関係を巡る4つの方法論的立場と、メタ理論的前提を巡る2つの方法論的立場がそうである。前者は、パラレル主義、共生主義、統一主義、第四の立場であり、後者は、分離主義と統合主義である。これらの各方法論的立場の関係をまとめると表4のようになる。分離主義と統合主義は、それぞれ、パラレル主義と共生主義、及び、統一主義と第四の立場を包含していることから、本稿では便宜上、前2者をマクロ的立場、後4者をミクロ的立場と呼ぶ。

パラレル主義と共生主義は、共に、事実と価値の二元論の前提に立っている。パラレル主義は、人間の前提や事実と価値という相反する分析対象をもつことなど多くの相違点があるため、規範的アプローチと経験的アプローチの補完関係など成立し得ないとし、ましてや、両分析アプローチを統一することなど不可能であるとする立場であった。一方、共生主義は、事実と価値の二元論の前提に立つものの、両論者が相手の理論を取り入れることで、自らの学説の質を向上させることができるとする立場である。共生主義者は、実際には、理想と現実の両方を知っておいた方がよりよい理論を構築できるとの考えをもっており、理論の相互適用を認める¹⁵。以上のように、両分析アプローチの補完関係が成り立つか否かという違いはあるものの、パラレル主義と共生主義は、事実と価値の二元論に立つ点で共通しているのである。以上のように、事実と価値の二元論に立っているという点から、両方法論的立場は、分離主義的方法論の中に位置づけることが出来る。

表4：企業倫理学の2つの方法論的枠組み

	分離主義的方法論		統合主義的方法論	
マクロ的立場	分離主義		統合主義	
メタ理論的前提	事実と価値の二元論		統合命題	
真理（事実と価値）	人間の主観を離れて存在するもの		イマジネーション	
不変性	常住不変なもの		常に変化するもの	
発見可能性	発見可能		発見不可能	
事実に対する理解	科学の分析対象である真理		イマジネーション	
価値に対する理解	哲学の分析対象である真理		イマジネーション	
ミクロ的立場	パラレル主義	共生主義	統一主義	第四の立場
メタ理論的前提	事実と価値の二元論	事実と価値の二元論	統合命題	統合命題
研究者	分離主義者	分離主義者	統合主義者	統合主義者
両分析アプローチの統一	不可能	不可能（だが補完関係は成立）	可能（必然性）	不可能であり何より不必要
論理的根拠	共約不可能性	理論の核心の違い（理論的原理、手法、メタ理論的前提）	理論混合（概念輸入、理論上の相互依存関係、理論統一）	プラグマティズム
研究者の例	マックス・ウェーバー、ニュートン	ネルら	トレヴィーニョ、ウィーバー	ローゼンソール、ブックホルツ

出所：表2と3を基に、筆者作成。

一方、統一主義と第四の立場は、ともに統合命題の前提に立っている。統一主義は、「事実」と「価値」はどちらも想像上の産物、すなわち、イマジネーションであり、規範論者と経験論者の分析対象は、ともに同じイマジネーションであるとする¹⁶。統一主義者は、両分析アプローチの諸矛盾点を相殺・補完することで、イマジネーションを分析する唯一無二の分析アプローチを発見すべきであると主張する¹⁷。

第四の立場も、「事実」と「価値」はイマジネーションに過ぎないとする点で統一主義と共通している。しかしながら、この立場をとる学者は、人間にできることは想像だけであり、唯一のイマジネーションが存在すると考えることもイマジネーションに過ぎないとする¹⁸。研究者は、自分の目的・

状況に合わせて、様々な分析アプローチを選択すればよいのであって、何も1つの統一された分析アプローチを生み出す必要はないのである¹⁹。このように、規範的アプローチと経験的アプローチが統一されるべきかそれともその必要はないと主張するかといった違いはあるものの、統合命題に立っているという共通点がある。以上のように、統合命題に立っているという点から、両方法論的立場は、統合主義的方法論の中に位置づけることが出来る。

おわりに

本研究では、企業倫理学の各方法論的立場を、どのメタ理論的前提に依拠しているのかに基づいて、企業倫理学の方法論的枠組みの中に位置づけた。企業倫理学では、もともと、分析アプローチとして、規範的アプローチと経験的アプローチの2つがとられていた。1990年以降、これら2つのアプローチをとる論者間の衝突が顕著になる中で、その関係を巡る4つの方法論的立場が提唱された。

それらは、パラレル主義、共生主義、統一主義、第四の立場であるが、これらは、メタ理論的前提の違いから、2組の方法論的枠組みに区分することが出来た。本研究では、事実と価値の二元論に基づく前二者を分離主義的方法論と、統合命題に基づく後二者を統合主義的方法論と名付けた。事実と価値の二元論と統合命題の違いの核心は、イマジネーション以外のものは存在するかないかという前提の違いである。そのため、メタ理論的前提の違いは、唯一の真理に到達することが出来るか否かという思想の違いとも深い関連があるといえるだろう。

今後、パラレル主義、共生主義、統一主義、第四の立場以外にもどのような方法論的立場が提唱されるのかは、注目されるべきところである。また、統合命題の前提に立つ統合主義者達の分析アプローチを整理し、それらを体系化していくのも、今後の研究課題の1つと言えるだろう。これらの課題は、本研究では、取り組むことが出来なかった。いずれにせよ、企業倫理学の方法論を体系的にまとめていくことの意義は、今後の企業倫理学の研究の進展という点からも、なおざりに出来ないものであろう。

注

¹ カーン（1990）は、文脈的アプローチ、フレデリック（1994）は、説明的アプローチ、記述的アプローチ、予測的アプローチなどと呼んでいる。

Kahn, W. A. (1990). "Toward an Agenda for Business Ethics Research." *Academy of Management Review* 15(2), p.312. Frederick, W. C. (1994b). "The Virtual Reality of Fact Vs. Value: A Symposium Commentary." *Business Ethics Quarterly* 4(2), p.171.

² 当該段落の内容は、De George, R. T. (2005). "A History of the Society for Business Ethics on its Twenty-fifth Anniversary." *SBE Newsletter* Vol.XVI No.2, pp.5-10、及び、Kahn, *op. cit.*を主に参照のこと。

³ Frederick, W. C. (1994a). "General Introduction: The Elusive Boundary Between Fact and Value." *Business Ethics Quarterly* 4(2), p.111.

- 4 Treviño, L. K., & Weaver, G. R. (1994). "Business ETHICS/BUSINESS ethics: ONE FIELD OR TWO?" *Business Ethics Quarterly* 4(2), p.113.
- 5 彼らの提唱した 3 つの立場についての内容は、Weaver, G. R., & Treviño, L. K. (1994). "Normative and Empirical Business Ethics: Separation, Marriage of Convenience or Marriage of Necessity?" *Business Ethics Quarterly* 4(2):129-143.を参照のこと。
- 6 事実と価値の二元論についての内容は、Freeman, R. E. (1994). "The Politics of Stakeholder Theory: Some Future Directions." *Business Ethics Quarterly* 4(4):409-421. Freeman, R. E. (2000). "Business Ethics at the Millennium." *Business Ethics Quarterly* 10(1):169-180. Frederick, W. C. (1994a). "General Introduction: The Elusive Boundary Between Fact And Value." *Business Ethics Quarterly* 4(2):111-112. Frederick. (1994b)., *op. cit.* Harris, J. D., & Freeman, R. E. (2008). "The Impossibility of the Separation Thesis: A Response to Joakim Sandberg." *Business Ethics Quarterly* 18(4):541-548. Hartman, E. M. (2008). "Reconciliation in Business Ethics: Some Advice from Aristotle." *Business Ethics Quarterly* 18(2):253-265. Treviño & Weaver. (1994)., *op. cit.* Weaver & Treviño. (1994)., *op. cit.* Werhane, P, H. (1994). "The Normative/Descriptive Distinction in Methodologies of Business Ethics." *Business Ethics Quarterly* 4(2):175-180.等を参照のこと。
- 7 Kuhn, T. (1976). "Theory-Change as Structure-Change: Comments on the Sneed Formalism." *Erkenntnis* 10, pp.190-191.
- 8 原著では方法論となっているが、日本語に翻訳した場合、手法の方が意味がよくとれるのでここではそのように表記している。Weaver & Treviño. (1994)., *op. cit.*, p.133.
- 9 統合命題についての内容は、Dienhart, J. W. (2006). "The Separation Thesis: Perhaps Nine Lives Are Enough." *Business Ethics Quarterly* 18(4):555-559. Frederick. (1994a)., *op. cit.* Frederick. (1994b)., *op. cit.* Harris & Freeman. (2008)., *op. cit.* Hartman. (2008)., *op. cit.* Rorty, R. (2006a). "Philosophy's Roll vis-a-vis Business Ethics." *Business Ethics Quarterly* 16(3):369-380. Rorty, R. (2006b). "Replies to Koehn, De George, And Werhane." *Business Ethics Quarterly* 16(3):409-413. Sandberg, J. (2008a). "Understanding the Separation Thesis." *Business Ethics Quarterly* 18(2):213-232. Sandberg, J. (2008b). "The Tide is Turning on The Separation Thesis?: A Response to Commentators." *Business Ethics Quarterly* 18(4):561-565. Wempe, B. (2008). "Understanding the Separation Thesis: Precision After The Decimal Point: A Response to Joakim Sandberg." *Business Ethics Quarterly* 18(2):549-553. Werhane, P, H. (2006). "A Place for Philosophers in Applied Ethics And the Role of Moral Reasoning in Moral Imagination: A Response to Richard Rorty." *Business Ethics Quarterly* 16(3):401-408.を参照のこと。
- 10 この方法論的立場についての内容は、Rosenthal, S. B., & Buchholz, R. A. (2000). "The Empirical-Normative Sprit in Business Ethics: A Pragmatic Alternative." *Business Ethics Quarterly* 10(2):399-408.に基づいている。
- 11 *Ibid.*, pp.405-406.
- 12 *Ibid.*, p.406.
- 13 Rorty. (2006a, b)., *op. cit.*
- 14 それぞれ、Koehn, D. (2006). "A Response to Rorty." *Business Ethics Quarterly* 16(3):391-399. De George, R. T. (2006). "The Relevance of Philosophy to Business Ethics: A Response to Rorty's 'Is Philosophy Relevant to Applied Ethics?'" *Business Ethics Quarterly* 16(3):381-389. Werhane, P, H. (2006).
- 15 Weaver & Treviño. (1994)., *op. cit.*, p.133.
- 16 *Ibid.*, p.138.
- 17 *Ibid.*, pp.135-138.
- 18 Rosenthal & Buchholz. (2000)., *op. cit.*, p.403.
- 19 *Ibid.*, pp.405-406.

参考文献

- Bernstein, R. J. *The New Constellation: The Ethical-Political Horizons of Modernity/Postmodernity*. (Cambridge: The MIT Press, 1992). (谷徹・谷優訳『手すりなき思考—現代思想の倫理—政治的地平—』産業図書, 1997.)
- De George, R T. (1987). "The Status of Business Ethics: Past And Future." *Journal of Business Ethics* 6:201-211. (宮坂純一訳「ビジネス倫理学の現在、過去そして未来」『産業と経済』7-2 奈良産業大学, 1992年.)
- De George, R. T. (2005). "A History of the Society for Business Ethics on its Twenty-fifth Anniversary." *SBE Newsletter* Vol.XVI No.2, pp.5-10.
- De George, R. T. (2006). "The Relevance of Philosophy to Business Ethics: A Response to Rorty's 'Is Philosophy Relevant to Applied Ethics?'" *Business Ethics Quarterly* 16(3):381-389.

-
- De George, R. T. 'The History of Business Ethics.' Epstein, M. J., & Hanson, K. O. ed. *The Accountable Corporation Vol.2—Business Ethics—*. (Westport, Conn.: Praeger, 2006).
- Dienhart, J. W. (2006). "The Separation Thesis: Perhaps Nine Lives Are Enough." *Business Ethics Quarterly* 18(4):555-559.
- Epstein, E. M. (1987). "The Corporate Social Policy Process: Beyond Business Ethics, Corporate Social Responsibility, And Corporate Responsiveness." *California Management Review* 29(3):99-114.
- Frederick, W. C. (1994a). "General Introduction: The Elusive Boundary Between Fact And Value." *Business Ethics Quarterly* 4(2):111-112.
- Frederick, W. C. (1994b). "The Virtual Reality of Fact Vs. Value: A Symposium Commentary." *Business Ethics Quarterly* 4(2):171-173.
- Freeman, R. E. (1994). "The Politics of Stakeholder Theory: Some Future Directions." *Business Ethics Quarterly* 4(4):409-421.
- Freeman, R. E. (2000). "Business Ethics at the Millennium." *Business Ethics Quarterly* 10(1):169-180.
- Harris, J. D., & Freeman, R. E. (2008). "The Impossibility of the Separation Thesis: A Response to Joakim Sandberg." *Business Ethics Quarterly* 18(4):541-548.
- Hartman, E. M. (2008). "Reconciliation in Business Ethics: Some Advice from Aristotle." *Business Ethics Quarterly* 18(2):253-265.
- Koehn, D. (2006). "A Response to Rorty." *Business Ethics Quarterly* 16(3):391-399.
- MacIntyre, A. *A Short History of Ethics: A History of Moral Philosophy from the Homeric Age to the Twentieth Century (2nd ed.)*. (Indiana: the University of Notre Dame Press, 1998).
- MacIntyre, A. *After Virtue (3rd ed.)*. (Indiana: the University of Notre Dame Press, 2007).
- Nel, D., Pitt, L., & Waston R. (1989). "Business Ethics: Defining the Twilight Zone." *Journal of Business Ethics* 8:781-791.
- Rorty, R. *Contingency, Irony, And Solidarity*. (NY: Cambridge University Press, 1989).
- Rorty, R. (2006a). "Philosophy's Roll vis-a-vis Business Ethics." *Business Ethics Quarterly* 16(3):369-380.
- Rorty, R. (2006b). "Replies to Koehn, De George, And Werhane." *Business Ethics Quarterly* 16(3):409-413.
- Rosenthal, S. B., & Buchholz, R. A. (2000). "The Empirical-Normative Sprit in Business Ethics: A Pragmatic Alternative." *Business Ethics Quarterly* 10(2):399-408.
- Sandberg, J. (2008a). "Understanding the Separation Thesis." *Business Ethics Quarterly* 18(2):213-232.
- Sandberg, J. (2008b). "The Tide is Turning on The Separation Thesis?: A Response to Commentators." *Business Ethics Quarterly* 18(4):561-565.
- Singer, M. S. (1998). "Paradigm Linked: A Normative-Empirical Dialogue About Business Ethics" *Business Ethics Quarterly* 8(3):481-496.
- Stark, A. (1993). "What's the Matter with Business Ethics." *Harvard Business Review* (May-June):38-48.
- Treviño, L. K., & Weaver, G. R. (1994). "Business ETHICS/BUSINESS ethics: ONE FIELD OR TWO?" *Business Ethics Quarterly* 4(2):113-128.
- Weaver, G. R., & Treviño, L. K. (1994). "Normative And Empirical Business Ethics: Separation, Marriage of Convenience or Marriage of Necessity?" *Business Ethics Quarterly* 4(2):129-143.
- Wempe, B. (2008). "Understanding the Separation Thesis: Precision After The Decimal Point: A Response to Joakim Sandberg." *Business Ethics Quarterly* 18(2):549-553.
- Werhane, P, H. (1994). "The Normative/Descriptive Distinction in Methodologies of Business Ethics." *Business Ethics Quarterly* 4(2):175-180.
- Werhane, P, H. (2006). "A Place for Philosophers in Applied Ethics And the Role of Moral Reasoning in Moral Imagination: A Response to Richard Rorty." *Business Ethics Quarterly* 16(3):401-408.